

ダニエルの書 - 第百十一番

黙示録の第一のわざわいにおけるアブバカルの預言的意義を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-03-02

第一の災いの預言的歴史において、Mohammed に続いた指導者は、Mohammed の義父である Abu Bakr Abdullah ibn Abi Quhafa であった。彼を Abubakar と呼ぶことにする。最初の四節には彼と Mohammed の双方が言及されている。Abubakar は Mohammed の後の最初のイスラムの統治者であり、彼が兵士たちに与えた命令が歴史に記録されていて、それが黙示録第9章4節に表されている。その命令は、第三の災いの到来、すなわち第七のラッパ、そして第三の天使の到来でもあった時に始まった封印の過程を表している。

第五の御使いがラッパを吹いた。私は一つの星が天から地に落ちるのを見た。その星に底知れぬ淵の鍵が与えられた。彼はその底知れぬ淵を開いた。すると、大きな炉の煙のような煙がその淵から立ち上り、その淵の煙のために太陽も空も暗くなった。その煙の中から、いなごが地上に出てきた。彼らには、地のさそりが持つような力が与えられた。また彼らには、地の草にも、どんな青いものにも、どんな木にも害を加えてはならないが、額に神の印のない人々に対してのみ害を加えるように、と命じられた。ヨハネの黙示録 9:1-4。

天から落ちた「星」はムハンマドであり、彼は606年にその宣教活動を始めた。ムハンマドには「底知れぬ淵」を「開く」ための「鍵」が与えられ、それによって「煙」が「太陽と空気」を暗くし、「サソリ」の力のような「力」が与えられた「いなご」が出現した。その「鍵」とは、ローマの軍事力に弱体化をもたらし、こうしてイスラムによる戦争の台頭を許した軍事的な戦いであった。「底知れぬ淵」はイスラムの発祥地であるアラビアの象徴であり、「煙」は、地上に広がって、北アフリカ、南ヨーロッパ、アラビアを席卷するいなごの大群が群がるのと同じ地域を占有することになる、イスラムという偽りの宗教を表していた。「いなご」はイスラムの象徴であり、「力」は預言的には軍事力を表す。彼らの力は、不意に襲う「サソリ」のようなものとなるはずであった。ユライア・スミスは次のように述べている：

天から一つの星が地上に落ちた。そしてその者に、底なしの淵の鍵が与えられた。

ペルシアの君主が自らの術と権勢の驚異について思索していたとき、彼は神の使徒としてムハンマドを認めるよう求める、メッカの無名の市民からの書簡を受け取った。彼はその招きを退け、書簡を引き裂いた。「このように」とアラブの預言者は叫んだ。「神は王国を引き裂き、ホスローの嘆願を退けるであろう。」東方のこの二帝国のはざまに置かれて、ムハンマドは相互破壊の進行を密かに喜びながら見守っていた。そしてペルシアの勝利のさなかに、幾年も経たぬうちに勝利は再びローマ人の旗のもとに帰ると、大胆にも予言した。「この予言がなされるとされる当時、これほど成就から遠い予言はありえなかった。というのも、ヘラクレイオスの最初の十二年間は、帝国の差し迫った崩壊を告げていたからである。」…

チヨスロエスは、アジアおよびアフリカ[における]ローマの領有地を征服した。そして、『「ローマ帝国」は、その時期には、コンスタンティノーブルの城壁と、ギリシア、イタリア、アフリカの残余、さらにアジア側海岸のテュロスからトレビゾンドに至るいくつかの海港都市にまで縮小されていた。六年にわたる経験はついに、ペルシアの君主にコンスタンティノーブルの征服を断念させ、ローマ帝国の身代金としての年貢を明示させた——金千タラント、銀千タラント、絹の衣千領、馬千頭、そして処女千人。ヘラクリオスはこの屈辱的な条件を受け入れた。しかし、東方の窮乏からそれらの財貨をかき集めるために彼が得た時間と猶予は、大胆で死に物狂いの攻撃の準備に勤勉に費やされた。』

ペルシャの王は取るに足らないサラセン人をさげすみ、メッカのにせの預言者の使信を嘲笑した。ローマ帝国が打ち倒されたとしても、イスラム教に門戸が開かれることも、偽りの教えを武力で広めるサラセン人の進軍に道が開かれることもなかっただろう。たとえペルシャの王とアヴァールのカガン（アッティラの後継者）が、ローマ皇帝の版図の残余を彼らの間で分割していたとしてもである。ホスロー自身も倒れた。ペルシャとローマの両帝国は互いの力を消耗し尽くした。そして、偽りの預言者の手に剣が渡される前に、彼の進路を阻みその権勢を粉碎し得たはずの者たちの手からは、すでにその剣が打ち落とされていた。

「スキピオとハンニバルの時代以来、帝国の解放のためにヘラクレイオスが成し遂げたものほど大胆な企てが試みられたことはない。彼は黒海を渡り、アルメニアの山岳地帯を横断して危険な行路を切り開き、ペルシアの中枢にまで突入して、流血にあえぐ祖国の防衛に大王の軍勢を呼び戻させた。」

ニネヴェの戦いは夜明けから第十一時まで激しく戦われ、折れたり破れたりしたものを別にすれば、軍旗二十八本がペルシア軍から奪取された。彼らの軍勢の大半は斬り伏せられ、勝者たちは自らの損害を隠して、戦場で夜を明かした。アッシリアの都市と宮殿は、ローマ人に初めて門戸を開いた。

ローマ皇帝は、自らが成し遂げた征服によって力を増すことはなかったが、同時に、しかもまさに同じ手段によって、アラビアから来たサラセン人の大群に道が開かれ、彼らは同じ地域からのイナゴの群れのように、行く先々で暗く欺瞞的なマホメット教の教義を広めながら、たちまちペルシア帝国とローマ帝国の双方を覆い尽くした。

この事実をより完全に示すものは、先の抜粋を採ったギボンのその章の結びの言葉以上には求め得ない。『ヘラクレイオスの旗の下に勝利の軍が編成されてはいたが、その無理な努力は、兵の力を鍛えるどころか、むしろ消耗させたように見える。皇帝がコンスタンティノーブルやエルサレムで凱旋しているあいだに、シリアの辺境にある無名の町がサラセン人に略奪され、救援に向かった部隊は斬り伏せられた——それが大いなる変革の前奏でなかったなら、ありふれた取るに足らぬ出来事にすぎなかったであろう。この盗賊たちはムハンマドの使徒であった。彼らの狂熱的な勇猛は砂漠から現れ、そして治世最後の八年間に、ヘラクレイオスはペルシア人から奪回していたのと同じ諸州をアラブ人に失った。』

『天に住処を持たぬ欺瞞と熱狂の精神』は、地上に解き放たれた。底なしの淵は、開くのに鍵ひとつを要するのみであり、その鍵こそがホスローの没落であった。彼は、

メッカの無名の市民からの手紙を、軽蔑して引き裂いた。だが、彼が「栄光の炎」から、いかなる眼にも見通せぬ「暗黒の塔」へと沈んだとき、ホスローの名はムハンマドの名の前にたちまち忘却へと消え去り、三日月は、星の落ちるのを待って昇るばかりに見えた。ホスローは、完全な敗走と帝国の喪失ののち、628年に殺害された。そして629年は「アラビアの征服」と「ムハンマド教徒によるローマ帝国への最初の戦争」によって記されている。「そして第五の天使がラッパを吹き、私は、一つの星が天から地に落ちるのを見た。そして彼には底なしの淵の鍵が与えられた。彼は底なしの淵を開いた。」彼は地上に落ちた。ローマ帝国の力が疲弊し、東方の大王がその暗黒の塔に死して横たわったとき、シリアの国境にある無名の町の掠奪は「巨大な革命の前奏」であった。「略奪者たちはムハンマドの使徒であり、彼らの狂乱の勇猛さは砂漠から現れ出した。」

「底なしの淵——この語の意味は、ギリシャ語（ ）に由来し、その語義は『深い、底なし、深淵の』であって、荒廃し、荒涼とし、未耕の場所一般を指すことがある。この語は、創世記1章2節において、地が原初の混沌の状態にあったことに適用されている。この場合、それはアラビア砂漠の未知の荒野を指すのが適切であろう。その周縁から、サラセン人の群勢がイナゴの大群のように繰り出してきたのである。そして、ペルシア王Chosroesの失墜は、底なしの淵の開口として十分に表しうる。というのも、それがムハンマドの追隨者たちがその人目につかぬ国土から現れ、火と剣をもってその惑わす教義を広め、ついにはその暗黒を東方帝国全体に覆い広げるに至る道備えとなったからである。」 Uriah Smith, Daniel and Revelation, 495-498.

第五のラッパである第一の災いは、ローマに対するイスラム勢力の戦いの始まりを示し、またローマとペルシャの間の戦いを指し示している。その戦いではローマが勝利したが、そのために軍事力を、イスラム勢力の台頭を阻止できないほどにまで消耗した。第一の災いと第二の災いの預言的特徴は、第三の災いの預言的特徴を明らかにしており、第三の災いの歴史の象徴として最初の二つの災いを認識することが重要である。なぜなら、その歴史は、2001年9月11日に始まった十四万四千人の封印の期間を表しているからである。最初の三節でムハンマドによって表される預言的歴史の後、第四節はムハンマドの後の最初の指導者であるアブー・バクルを紹介している。

そして彼らには、地の草にも、何の青草にも、どんな木にも害を加えてはならないこと、ただ額に神の印のない人々だけを害するようにと命じられた。黙示録 9:4

アブー・バクルの命令は、当時ローマ領内に存在した二種類の礼拝者を区別するよう、イスラム教徒の戦士たちに指示した。一方はカトリックで、一部の修道会には後頭部を剃る（トンスラ）の習慣があり、日曜日の礼拝を守っていた。もう一方は第七日の安息日を守る者たちであり、安息日は神の印である。

ムハンマドの死後、西暦632年にアブー・バクルが指揮権を継承した。彼は自らの権威と政権をおおむね確立するとすぐに、アラブ諸部族に宛てて回状を送った。その文面の抜粋は次のとおりである。

「主の戦いをするときには、背を向けることなく、男らしくふるまえ。ただし、その勝利を女や子どもの血で汚してはならない。ナツメヤシの木を滅ぼすな。穀物畑に火を放つな。実のなる木を切り倒すな。家畜に害を加えるな。ただし食べるために屠るものだ

けは別だ. いかなる盟約や取り決めを結んだとしても、それを守り、約束どおりに誠実であれ. 道中、修道院に隠棲し、そのような仕方でも神に仕えようとする宗教者たちに出会うだろう. 彼らには構わず、彼らを殺したり修道院を破壊したりしてはならない. また、サタンの会堂に属し、頭頂を剃り上げた別の種類の者たちにも出会うだろう. 必ず彼らの頭蓋を割り、イスラム教徒に改宗するか貢を納めるまで、いささかも容赦するな.」

予言にも歴史にも、より人道的な戒めがあつたのと同じほど厳格に守られたとは記されていない. しかし、彼らにはそのように命じられていた. そして、前掲のものこそが、サラセンの全軍に命令を発する任務を負った諸将にアブー・バクルが与えたものとして、ギボンが記録した唯一の指示である. その命令は予言と同様に峻別のであり、まるでカリフ自身が、死すべき人間の命令にまさる高次の命令に自覚的かつ直接的に服従して行動していたかのようなようであった. そして、イエスの宗教に対して戦いを挑み、その代わりにイスラム教を広めるために出陣するそのまさにさなかに、彼は、イエス・キリストの黙示において彼が語るだろうと予言されていた言葉を繰り返した.

彼らの額にある神の印-7章1~3節に関する所見において、神の印が十戒の第四戒である安息日であることを示した. また、現在のこの時代を通して、真の安息日を守る者が絶えず存在してきたという事実について、歴史は沈黙していない. しかし、ここで多くの人が抱く疑問は、この時にその額に神の印を持ち、それによってイスラム教徒の圧迫を免れたのは誰であったのか、ということである. 読者は、すでに触れたように、この時代を通して、その額に神の印を持っていた、すなわち真の安息日を理解して守っていた人々が存在してきたという事実を心に留めていただきたい. さらに、この予言が主張しているのは、荒廃をもたらすトルコ勢力の攻撃は彼らに向けられたのではなく、別の一群の人々に向けられたのだ、という点であることを考えていただきたい. そうであれば、この主題に何の困難も残らない. というのも、予言が実際に主張しているのはこのことだけだからである. 本文で直接取り上げられているのはただ一つの種類の人々、すなわち額に神の印を持たない人々であり、神の印を持つ人々の保護については、含意によってのみ示されている. したがって、歴史からは、サラセン人がその憎しみの対象に加えたどのような災厄にも、これらの人々の誰かが巻き込まれたとは伝えられていない. 彼らは別の種類の人々に対して差し向けられていたのである. しかも、この人々の上に来る滅びは、他の人々の保全と対比されているのではなく、ただ地の実りと緑の保全と対比されている. すなわち、「地の草にも木にも、どんな緑の物にも害を加えるな. ただ、ある種の人々だけにせよ」と. そしてその成就として、通常そのような軍勢が破壊するはずのもの、すなわち自然の景観と産物を侵略軍が温存するという奇異な光景を目にするのである. そして、額に神の印のない者たちを害することが許されていたという許可に基づき、サタンの会堂に属する、頭頂を剃髪した宗教者の一派の頭蓋を割っていた.

これらは、疑いなく修道士の一派、あるいはローマ・カトリック教会の何らかの別の分派であった. こうした者たちに対して、イスラム教徒の武力が向けられた. そして、彼らを「その額に神の印を持たない者」と描写することには、意図とまでは言わずとも、特有の適合性があるように思われる. というのも、真の安息日を引き裂いて取り去り、その代わりに偽物を据えることによって、神の律法からその印を奪ったのは、

まさにその教会だからである。さらに、予言からしても歴史からしても、アブー・バクルが部下に手出しするなど命じた人々が神の印を有していたとか、必ずしも神の民を構成していたとかは、私たちは理解していない。彼らが何者で、いかなる理由で助命されたのかについては、ギボンの乏しい証言は何も教えてくれず、またそれを知る他の手だてもない。しかし、神の印を持っていた者たちは誰一人として害されず、これに対して、それを明白に持っていなかった別の階層は剣にかけられたと信すべき十分な理由がある。こうして、その予言の規定は十分に満たされたのである。
ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』500-502.

アブバカルはムハンマドの死後、ムハンマドの信徒をカリフ国家に統合した。したがって、二人は別個の歴史上の人物ではあるが、両者を合わせると第一の災いにおけるイスラム教の証しの始まりを表しており、第一の災いの歴史を画する歴史的人物はムハンマドである。

第二の災いの歴史の始まりにおいて、1453年にメフメト2世がコンスタンティノープルを征服した。1449年には、イスラムを象徴する四人の天使が解き放たれた。第一の災いの始まりと終わりは、それぞれメフメト1世とメフメト2世によって印づけられている。預言的に言えば、第一の災いの歴史の始まりと終わりは、アルファとオメガの印を帯びている。

第二のわざわいの始まりには、四人の天使に関する時の予言が含まれている。彼らはイスラムを表しており、いったん解き放たれ、その後1840年8月11日に拘束された。そこから1844年10月22日まで、十四万四千人の封印が示されている。第二のわざわいの始まりはイスラムの解放を、終わりはイスラムの拘束を示している。第一のわざわいと第二のわざわいの双方には、その始まりを終わりと結びつける正確な預言的標識がある。

最初の二つの災いは、第三の災いを見分けるために、「行に行を重ねる」ように互いに重ね合わせられるべきである。イスラムの最初の二人の証人によって示される預言的特徴の一つは、彼らが、始まりと終わりがアルファとオメガの印で示される特定の期間を表しているということである。彼らはまた第二のしるしも持っており、第一の災いの始まりが神の民の封印を示し、第二の災いの終わりもまた神の民の封印を示す。

第三のわざわいは、イスラムが突如として不意に黙示録13章の地の獣を攻撃したときに到来し、それによって封印の期間が始まった。十四万四千の封印は、やがて到来する日曜法の時に終わり、その背教の結果として、国家的背教の後には国家的破滅が続く。異教ローマと教皇ローマに見られる型のとおり、国家的破滅は神のラッパの裁きによってもたらされる。三つのわざわいは、またラッパでもある。第三のわざわいとしてのイスラムは、十四万四千の封印の期間が終わる、やがて到来するアメリカ合衆国の日曜法の時に、再び突如として不意に打撃を与えるだろう。その期間は、第一のわざわいの初期によっても、また第二のわざわいの終期によっても、型として示されてきた。

次回の記事でこの研究を続けます。

サラは、エジプト人ハガルがアブラハムに産んだ息子があざけているのを見た。そこで彼女はアブラハムに言った。「このはしめとその子を追い出してください。このはしめの子が、私の子、イサクとともに相続人となることはありません。」自分の子のことだったので、このことはアブラハムには大いに心を痛めることとなった。す

ると神はアブラハムに言われた。「少年のこと、またあなたのはしためのことで、心を痛めてはならない。サラがあなたに言うことはすべて、その声に従いなさい。イサクによってあなたの子孫が呼ばれるからだ。だが、はしための子からも一つの国民を起こそう。彼もあなたの子孫だからである。」アブラハムは朝早く起き、パンと水の皮袋を取り、それをハガルに与えて彼女の肩に負わせ、また子どもも渡して、彼女を送り出した。彼女は去って、ベエル・シェバの荒野をさまよった。やがて皮袋の水が尽きたので、彼女はその子を一本の灌木の下に置いた。彼女はそこから離れて、彼の向かい側はかなり遠く、弓一張りほどの距離に行って座った。彼女は言った。「子どもが死ぬのを見るのは耐えられません。」こうして彼女は彼の向かいに座り、声を上げて泣いた。神はその少年の声を聞かれ、神の使いが天からハガルに呼びかけて言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れるな。神はそこにいる少年の声を聞かれた。立って、少年を起こし、手を取って支えなさい。わたしは彼を大いなる国民とする。」すると神は彼女の目を開かれ、彼女は水の井戸を見た。彼女は行って、皮袋に水を満たし、少年に飲ませた。神は少年とともにおられ、彼は成長して荒野に住み、弓の射手となった。創世記 21:9-20.